小山工業高等専門学校研究紀要
第 48 号(2015)　29－ 36

GTEC ライティング問題の事前指導

ー 本番で実力を発揮させるためのアドバイス ー

杉山　桂子 *1

Preparative Guidance for Students on the Writing Section of GTEC

ー Advice on How to Display their Abilities on a Real Stage ー

Keiko SUGIYAMA

This paper is concerned with the preparative guidance on how to work on the GTEC writing section that I gave to four classes of second-grade students at my college in 2004. First, I will describe what kind of task examinees are to work on in this section and state that in the past some students could not write a sufficient number of sentences for their abilities to be appropriately evaluated, even if they had a substantial vocabulary and grammatical competence. Next, I will argue that in order for students to display their abilities in the writing section, some pieces of advice, such as guidelines for creating paragraphs, should be given to them beforehand; at the same time, I will also show how I actually gave such guidance to the students in my classes. Finally, I will compare the essays that those students wrote on the real test with the students that took the same test in the preceding year, and show that the preparative guidance had a beneficial effect on the amount that the students wrote. In addition, I will show that the guidance fortunately made a difference to the growth of students' scores.

KEYWORDS : GTEC writing section, the amount of writing, preparative guidance, paragraph writing

1. GTEC ライティングで力を発揮できない学生達

まずここで言う GTEC とは、正式には GTEC for STUDENTS という名称であり、(株)ベネッセコーポレーションが提供する英語検定である。このテストの問題は、普通、リーディング、リスニング、ライティングの３つのセクションからなり、テスト結果は 0〜810 点で採点される。受検者は、この得点と次ページの表１を照らし合わせることで、自分の英語の能力レベルを知ることができる。なお、オプションでスピーキングセクションをテスト問題に組み入れることも可能である。

GTEC には、難易度の違いで３つのタイプの問題があり、その３つの名称はそれぞれ、スコアの上限が 440 点の Core タイプ、スコア上限が 660 点の Basic タイプ、スコア上限が 810 点の Advanced タイプである。小山高専では、１年生に Core タイプを、２年生に Basic タイプを毎年受検させ、その得点の差から、個々の学生が１年間で

*1 一般科(Dept. of General Education), E-mail: sugiyama@oyama-ct.ac.jp

どれだけ英語の力を伸ばしたのかを客観的に確認している[注1)]。

表１　GTEC スコアと英語能力の相関性

GRADE	TOTALスコア	推奨スコアガイドライン	
7	710~810	Advanced-Plus Learner	大学での専門教育を英語で学べるレベル
6	610~709	Advanced Learner	海外進学を視野に入れることができるレベル
5	520~609	High Level 高校英語上級レベル	海外の高校の授業に参加できるレベル
4	440~519	Intermediate Level 高校英語中級レベル	海外ホームステイや語学研修で楽しめるレベル
3	380~439	Primary Level 高校英語初級レベル	ALTと日常的な会話をし、英語体験を楽しめるレベル
2	300~379	Introductory Level	定型的なやりとりであればできるレベル
1	~299	Preparatory Level	挨拶程度の簡単なコミュニケーションができるレベル

高校卒業時の推奨グレード

（GTEC for STUDENTS 公式 HP より）

本稿で主に扱う GTEC ライティング問題とは、ある課題文に解答する形で自由に英文を書く、制限時間 20 分の問題である。この問題で測定されるのは、受検者が制限時間内に自分の意見を説得力もって表現できるかどうかである。例えば 2013 年度に本校の２年生が取り組んだ Basic タイプの課題文を下に示す。

(1)　今まで学んだことで、役に立っていると思うことは何ですか。1 つ取り上げてなぜそう思うか、理由を書きなさい。(2013 年度 Basic 問題)

テスト本番では辞書の持ち込みは許可されない。学生達は本番このような課題文を初めて目にし、解答に臨むことになる。学生達の様子は様々であり、解答用紙の半分以上を埋められる学生もいれば、残念なことに答えが白紙の学生や答えを数文しか書けない学生もいる。

この少量の文しか書けない学生達は、全員が必ずしもやる気や実力が無いわけではない。なぜならその中には、他のセクションでは好成績をおさめていて、英語力があると考えられる学生もいるからである。(1)の 2013 年度の課題文に対する実際の２年生の解答を２つ下にあげる。

(2)　I think math helped me because I passed the exam of [入試].

(3)　It's very difficult for me to choose the most useful thing I have learned.

この解答を書いた学生達は、リーディングセクションの成績は Grade 4 または 5、つまり高校中級または上級レベルの好成績であった。それにも関わらず、ライティングの成績は Grade 2 つまり中学生レベルと判断されている。

(2)の解答は、語彙力不足から日本語混じりとなっている。残念なことに、採点者は海外にいる外国人であるため、日本語を書いても全く情報は伝わらない。しかし、日本人の読み手には、質問の答えとその理由(すなわち「数学が役に立った。なぜなら入試に受かったから。」)が伝わり、少なくとも、この学生は真剣に問題に答えようとしていたことがわかる。この学生がもし事前に、採点者が日本人でないことや、答えの内容は自分が英語で表現できるものを選ぶべきだと知っていれば、もっと点が伸びたのではないだろうか。

(3)の解答は、文の構造や使われている表現から、書き手に英語力があることがわかる。ただし、この解答では、質問に答えていないと評価されてしまう。この学生の場合には、自分の本当の情報を書くことよりも、多少作り話が入ってもいいのである程度の量の英文を書くように、と事前指導していれば結果が変わったのではないかと思われる。

GTEC 受験後に送られてくる個人成績票に書いてあるように、ライティング問題はある程度の量の文を書かないと一定以上の成績がつかない可能性がある。ある人がどれほどの語彙力や表現力をもつかはある程度の長さの文を見てみないと判断できないので、それは当たり前のことである。とはいえ、それをはっきり伝えないとわからない学生もいる。

(2)や(3)の学生のように、問題に取り組む意志があったり、単語力や文法知識がある学生達が、十分な量の文を書かずに、ライティング問題で力を発揮できない、またはその能力が正確に測定されないのはとても残念なことである。このような学生を生まないためには、本番前に何らかの事前指導が必要である。

本稿の目的は、学生達が GTEC のライティング問題である程度の長さの解答を書くのに必要な事前指導は何であるかを、その指導の実践例も交えて報告することである。

２．事前指導

筆者は 2014 年度後期に、2L、2R、2C、2A の

「ライティングB」を担当し、それぞれのクラスでGTEC受検前に2時間から4時間、下記のようなGTECライティング問題のための事前指導を行った。

2.1 例題に取り組ませる：学生が少量の文しか書けない理由

まずは下の(4)のGTECの例題を、辞書を使わずに本番の気持ちで取り組むようにと指示する。この活動の目的は、本番の気分や難しさを体感させるためである。

(4) あなたがいつか旅行したい場所はどこですか。1か所とりあげて、なぜ行きたいのか、自分の考えを英語で述べなさい。

なお、GTECの例題は、受検者に配布されるGTECステップアップドリルから持ってくることができる。そうせずに、本番で出された問題を練習で使用するのは、まれに、同じ問題が別の本番でも使われることがあるので、避けるべきである。

本番では20分の解答時間があるところを、この体験版では5〜10分程度で解答をやめさせる。この時点で多くの学生が1〜3文程度の解答を書いたものの、それ以上は書き進まないといった様子である。例として下の(5)〜(7)に3名の学生の解答をあげる。なお、ここでは読みやすさを重視するため、スペルミスや文法上のミスなどは著者の方で訂正したものを紹介する。

(5) I want to go to Okinawa because Okinawa is very hot.
(6) I want to visit Kyoto because there are many beautiful buildings, old temples and delicious food.
(7) I want to visit Australia. There are many Koalas in this country. So I can touch them. And I want to see Kangaroos.

(5)では、行きたい場所と理由が1つずつ書かれた、1文の解答となっている。(6)の学生は、理由として京都の魅力を3つ(大きく分ければ、建物と食べ物の2つ)を書いているが、文の量としては1文に留まっている。(7)の学生はオーストラリアの魅力を2つ(コアラとカンガルー)あげて、比較的多い4つの文を書いている。しかし最後に「カンガルーを見たい」と書いた後は、コアラと内容が重複しそうなためか、新たな文を書けない様子である。また、andの使い方も不自然である。

このように学生達の解答の様子を観察すると、学生達が少量の文しか書けない(書かない)理由には、下の(8)から(12)の5点があると考えられる。

(8) 課題文が今まで自分が尋ねられたり考えたりしたことのない内容である。強いて旅行してみたい場所を考えついたとしても、理由は特にないか、せいぜい1つしか考えつかない。
(9) 答えや理由を書こうとしても、英単語を知らない、スペルがわからないなどで、英語で表現できない。
(10) 複数の理由や考えを自然につなぐ方法や並べ方がわからない。
(11) 「何文くらい書きなさい」という指定がないので、答えと理由を書いてしまえばそれ以上の文を書く必要性を感じない。
(12) 文を多く書きたいと思っても、答えと理由の他に、どんな文をかけばいいのかわからない。

GTECライティング問題で、ある程度の量の英文を書かせるためには、このような問題を解決する事前指導が求められる。

2.2. 書く量を増やすためのアドバイス

学生に本番の難しさを体験させたあとに、解答のアドバイスを次のように教えていく。

2.2.1 答えの基本的な型・段落構成

過去のライティング問題の模範解答をいくつか見ると、内容は違っても、すべてパラグラフ・ライティングと呼ばれる情報の並べ方で文章が書かれている。この書き方を簡単に概説すると、まず、「話題に関する書き手の主張の総論」(いわゆるtopic sentence)を書き、次に「その主張を支える具体的な理由や例」(supporting sentenceまたはdetail sentence)を書き、最後に、主張の総論を言い換える形で「結論文」(concluding sentence)を書くというものである。(大井編(2008:20-24),伊藤(2002:2)参照)

事前指導では、解答の基本的な型・パターンとして、このパラグラフ・ライティングに基づいた

解答例を下の資料１のようにまとめて、学生に教えた。その際には、それぞれの段落では何文くらい書くべきかといった目安も学生達に示した。

資料１　解答の基本的な段落構成

この解答のパターンを簡単に説明すれば、第１段落が答えの段落で、真ん中の２つが理由の段落、そして最後が結論の段落である。もし理由が１つしか思いつかなければ、答えと結論の段落を足して、合計３段落の解答となり、もし理由が３つあれば、合計５つの段落の解答となる。

この段落構成を頭に入れる際に重要なのは、“There are two reasons for this.”などの太字の表現、つまり、つなぎの決まり表現を暗記することである。これは資料２のように抜き出し、別の言い方も添えて学生達に教えた。

● 第１段落中の「次の段落につなぐ表現」
- There are two reasons (for this).
- I have two reasons (for this).

● 第４段落中の「上の段落からつなげる表現」
- For these reasons, ...
- {So / Therefore}, ...

資料２　つなぎの表現

このような基本的な解答のパターンを知っておくことは、学生にとって３つのメリットがある。１つ目は、答えと理由が読み手にはっきり伝わる。２つ目は、理由が仮に１つまたは１文だとしても、つなぎの表現や結論を書くことで、文の量が増える。３つ目には、理由が複数ある場合、それらを別の段落に分けて入れるため、複数の理由をつなぐ方法に苦慮する必要がなくなる。例えば、上に紹介した(7)の解答に見られるような、接続詞 and を不自然に使うこともなくなるのである。

2.2.2 解答を書く前にメモを書く

次に教えることは、「解答を書き出す前に 5〜8 分くらい時間をかけて、問題用紙の余白部分に解答の下書きやメモを書くこと」ということである。

下書きを書く理由は、本番で解答のアイディアが思いつき、いざ英文で書き始めたが、ある英単語が思いつかずに書く内容を変更する(つまり書いたものを全部消す)、ひいては解答時間が足りなくなり少量の文しか書けなかった、という学生が見られるからである。

このメモの書き方については、「基本的に日本語で書いてよい、英語混じりでもよい、早さが重要なので自分が読めれば汚くてもよい」と教える。さらに、下の資料３の注意事項も念頭に置いて書くようにとも教える。

① 自分が英語で表現できるシンプルな内容にする。
② フィクション(作り話)が入っても構わない。ある考えを英語で伝えたり、ある程度の量の文を書く力が問われる。
③ 採点者は外国人なので、日本語を使ったらそのあとにコンマと英語の言い換え表現もつける。
例 I like sitting on tatami, a Japanese carpet.
④ 文頭を小文字で書くなど、英語のミスは減らそう。ただしスペルや冠詞の選択など、その場で判断がつかないことならミスを気にせずに書こう。
⑤ 「例」や「空想」、「一般の意見」などを入れて、文の数を増やそう。表現例: “For example, ...” や “If I do ..., I will do ....” や “It is often said that....”など。

資料３　日本語メモの書き方

メモの書き方を説明したあと、下のメモ例を紹介する。これは、上記(4)の例題に対して著者が作成したものである。

(i) 私は Britain へ旅行したい。理由は２つある。
(ii) First, 私はイギリス英語を学ぶのが好き。英語はたくさんの国で話されているけど、イギリスは [その言語が初めて使われた] 国 だ。だから(That's why) 私はそこに行って、聞きたい現地の(local)人々が英語で話しているのを。
(iii) Second, 私はイギリスのファッションに興味がある。It is often said that イギリス人はおしゃれである。Also, 私はテレビ番組を見たことがある [in which イギリスの人たちがおしゃれなコートやジャケットを着ている]。私は同じ種類の服を日本で見つけることができなかった。だから、if I go to Britain、すてきな服を買いたい。
(iv) For these reasons, 私はイギリスに行きたい。私はアルバイトをして、その国に行くためのお金を貯めようと思う。

資料４　日本語メモ例

この日本語メモ例を作成する際には、学生達が英文にしやすそうな内容にすることを心がけた。そして紹介の際には、メモを１文読み上げ、その直後に英訳も付け加えていく形で紹介した。学生達には、このメモや対訳を聞きながら、難しい表現を使わなくても長い解答を書けることを実感してもらうことが重要である。

以上のようにメモの１例を紹介した後には、以下の(13)から(17)のような補足説明も口頭で行う。

(13) 私(筆者)がこの日本語メモを書いたが、多くの部分が作り話である、つまり自分が英語で書きやすいと思ったお話を作ったのである。
(14) メモの中の(i)などの数字は段落数を示していて、英文にする際には不要なものである。
(15) □や[　]はそれぞれ、英語で書く際には先行詞と[関係節]となることの私なりのメモである。各自で判断して自分流に記号等を入れてもいい。
(16) 第３段落では、“It is often said that”や If 文を用いて、一般論や空想をいれて文を増やしてある。この「イギリス人がおしゃれかである」が本当に一般論であるかどうかは主観で構わない。
(17) 最後の段落で感想を書く場合には、未来に関する願望や予定を考えると書きやすい。

2.2.3. 例題１の日本語メモを書かせる

基本的な段落構成と日本語メモの書き方を教えたあと、学生達に再び例題1(上記(4))について考えさせ、今回は日本語メモを書かせる。その際、注意事項に留意しながら、資料１に紹介した段落構成で書くようにとも指示する。

事前説明無しで例題に取り組んだ時とは異なり、今回の活動では、メモ作成のポイント「フィクションが入っても構わないから、自分が英語で表現できるお話し作りをする」という点が学生達の創造力を刺激するようで、ほとんどの学生達がクラスメートと「○○って英語でどう言える?」と相談しながら、主体的にこの活動に取り組むようになる。

学生が取り組んでいる間、教員は学生の机を回り、表現の質問を受けたり、話の作成に行き詰まっている学生の助けをする。中にはストーリー作成に熱中しすぎて、英語で表現できるのか疑わしいメモを書き出す学生が出てくるので、「これは英語でどういうつもり?」と質問をしたりもする。

5～8 分取り組ませたあと、「途中でもいいから」と中断させ、ペアでお互いのメモを読み上げさせる。その後に、教員が巡回中に探しておいた良い作品(説得的かつ英語にしやすそうな日本語メモ)をクラス全体に紹介する。今回は多くの学生達が、4 文以上からなる話を作り上げていた。

下の(18)～(20)は、それぞれ上の(5)～(7)の解答を書いた学生達の日本語メモである。

(18) 沖縄に行きたい。理由は３つです。
１つ目は、とても暖かいから。
２つ目は、沖縄の食べ物が食べたいから。
３つ目は、海がとてもきれいだから。
以上の理由から私は沖縄に行ってみたいです。

(19) (i)私は京都に行きたい。理由は２つある。
(ii) １つ目は、私は建物を見るのが好きで、京都には美しい建物や古いお寺などがたくさんあるから。例えば、金閣寺や清水寺などの有名な建物があります。それらを見に行ったら、写真をたくさん撮りたいと思います。
(iii) ２つ目は、おいしい食べ物があるから。特に、私は甘い物(スイーツ)が好きなので、京都ではテレビで紹介されていた(見た)あんみつ(Japanese sweets)を食べたいです。
(iv) For these reasons, 私は京都に行きたいです。そのために、アルバイトをしてお金を貯めようと思います。

(20) (i)私はいつかオーストラリアに訪れたい。その理由は２つある。
(ii)まず１つ目は、オーストラリアにはコアラがいる。私は小さい頃から、コアラに触ってみたいと思っていた。
(iii) ２つ目は、オーストラリアでは、夏にサンタクロースが来る。夏の海で一緒に泳ぐことが夢だ。
(iv)これらから、私はオーストラリアに行きたい。そのために、オーストラリア英語を今たくさん勉強したい。

この３人の学生の解答は、個々の学生達の英語の能力で十分書き換えが可能なものであり、また

(5)～(7)と比べると量や内容面で次のように改善した。まず(18)の学生は、(5)の解答では理由が１つだけであったが、今回のメモでは理由を３つに増やし、文の量も１文から６文へと増やした。(19)の学生は、(6)では京都の２つの魅力(その建物と食べ物)を１文だけで表現していたが、今回はその２つの理由を２つの段落に分けて書き、それぞれに具体例や空想を付け足している。最後の段落では未来への願望も書き足していて、全体の文量が10倍近く増えている。(19)の学生は、今回の話では、２つ目の理由を１つ目の理由とは性質の違うもの、すなわち動物ではなく夏のサンタクロース(夏のクリスマス)に変えることで、より観点が豊かで説得的な解答となっている。文の量も４文から８文に増えている。

このように、事前指導をすれば、学生達は自分の語彙力や表現力と相談しながら日本語メモを書き上げ、ライティング問題にある程度の文量で解答できるようになる。この効果も大きいが、学生達の取り組み姿勢が、始めの「書くのが難しい、英語にできない」といった苦しいものから、「どのような英文を書こうか、話にしようか」といった能動的な姿勢に変わることも、意義深いことである。

2.2.4　その他の例題

GTEC ライティング本番でどのような課題文を目にしても、学生達がある程度の量の英文を書けるようになるためには、複数の例題にとりくませて日本語メモやメモに基づいた英文を書かせるのが効果的である。

今回、事前指導を試みた４クラスにも、上の(4)の例題に加え、下の(21)～(23)のような例題に取り組ませた。テキストの進度の違いから、一部のクラスでは合計２つの例題に、その他のクラスでは合計４つの例題に取り組ませることになった。なお、本番では辞書などの助けは得られないが、(22)と(23)では、括弧内に示すような解答に欠かせないであろう表現も参考として併記した。

(21) 夏休みや冬休みを利用して、あなたがやってみたいことはなんですか。１つ取り上げて、なぜそう思うのか、その理由を英語で書きなさい。

(22) あなたが将来、自分の子供を持つとしたら、させてみたい習い事はなんですか。理由や具体例を用いて、自分の考えを書きなさい。
(関連表現: want sb to do…=sb に…してほしい; learn to do ...=...するのを習う)

(23) あなたが日常生活でできる手伝いとはどのようなことですか。そうする理由は何ですか。身近な事例や経験などを取り上げて、あなた自身の考えを書きなさい。
(関連表現: help (to) do…=...するのを手伝う; help sb (to) do... =sb が...するのを手伝う; help sb with sth =sb を sth に関して手伝う)

学生には授業中、指定の用紙に日本語メモや英文を書かせて、授業の終わりにその用紙を教員が回収した。なお、教員側のチェックに費やす時間の制約から、英文は１つまたは２つの例題についてだけ書かせて提出させた。その後教員は、日本語メモについては基本的な段落構成となっているかを重視して添削し、英文については文法的なミスについてのみ添削して、学生にそのプリントを返却した。

2.2.5　本番での取り組み方に関する補足事項

上記のような事前指導を行った後、学生達には「ここで教えた解答方法は、解答の文量を増やすための単なるアドバイスであり、本番に必ずこのやり方で解答しなければならないというものでは無い。本番でもし、この方法だとかえって解答するのが難しいと感じたら、自分のやりやすい方法で自由に解答してもよい」と伝えた。

書き方を学生に選択にさせた理由は、本番で緊張してつなぎの表現などを忘れてしまう学生や、過去に基本的な段落構成で解答しなくても、様々な表現を使い、多くの文章を書いて高得点を取った学生もいたからである。

しかし、試験後の解答用紙を見ると、指導を受けた学生達の約 67%が、事前指導で紹介した段落構成で解答しており、また約 27%の学生が、つなぎの表現や結論(答えの繰り返し)が無いなどはあったが紹介した段落構成での解答を試みていた。つまり、合計約 94%の学生が、アドバイスを参考に解答しようとしていたことがわかった。

3. GTEC 試験結果に見られる事前指導の効果

２章に記したGTECライティング問題の事前指導は、学生がある程度の長さの解答を書く助けとなったであろうか。ここでは、私が事前指導をした2014年度の2LRCAの４クラスと、事前にそのような指導を受けなかった 2013 年度の同学科クラス(2EDCA)の比較を行いたい。なお、2M クラスについては、著者は2014年度に授業を担当していないので分析の対象から外す。また、2014年度の2LRと、2013年度の2EDは、学科再編成のため名称は異なっているが、実質的には同学科のクラスと見なす。

比較の前にまずは、この２種類の学生達が本番で取り組んだ課題文を下に示す。

(24) 今まで学んだことで、一番役に立っていると思うことは何ですか。１つ取り上げて、なぜそう思うか、理由を書きなさい。(2013 年度 Basic ライティング問題)(上の(1)と同じ))

(25) 日常生活の中で、あなたが自分以外の人(周囲の人や家族)のために、心がけるべきことや、すべきことは何ですか。１つ取り上げて、なぜそうすべきと思うのか、その理由を書きなさい。(2014年度Basicライティング問題)

異なる課題文に取り組んだ学生達の得点を比較することについては異論がでるかもしれないが、その点は問題ない。(株)ベネッセコーポレーションの説明によれば、ライティングの得点は、採点者が素点を決定したあと、IRT と呼ばれる統計処理を行い、異なる出題でも比較可能なスコアを算出しているとのことである。

さて、下の表にて解答の英文数が３文以内であった学生がどれくらいいたかを示す。

表２　解答の文量の変化

	2013年度 2EDCA	2014年度 2LRCA
解答が3文以内	18人 (全体の11.3%)	5人 (全体の2.8%)

ここで「解答が3文以内かどうか」に注目している理由は、GTECではライティングの力をGrade 1～７の７段階に分類しており、「２～３文の英語で自分の考えを書くことができる」はGrade ２すなわち「中学校レベル」のライティング力と判断されるからである [注2)]。ただし、厳密に言えば、同じ１文でも複数の節が含まれていれば評価が上がる可能性があるが、本稿ではその違いは考慮しないこととする。

表２によれば、問題の学生の数は、2014年度では前年度の学生の数の約３分の１に減っており、事前指導の目的、すなわち「学生達により多くの文を書かせ、本領を発揮させる」がある程度達成されたと考える。

今回の事前指導は、学生達の持つ力を発揮させるためのもので、英語力を積極的に伸ばすためのものではなかったが、成績に関して思わず良い結果が得られたので、それを下の表に紹介したい。

表３　成績の比較

	２年次の平均点	１年次での平均点	前年度からの伸び
2013年度 2EDCA	101.9	92.7	+9.2
2014年度 2LRCA	102.8	84.9	+17.9

比較の前に、Basic タイプのライティング問題の点数について一般的な話をすれば、この問題の満点は160点であり、全国の高校２年生の平均点は104点である。そしてこの全国高２の平均点も、表３に見られる小山高専２年生４クラスの平均点(101.9と102.8)も、７段階あるグレードの中では、Grade 4 に属する。このグレードでは「自分の意見や感想を整理し、文章構成を意識して書くことができる。英語の手紙や電子メールなどで、ある程度まとまった内容を、それほど辞書を引かずに書くことができる」と言われている。

さて、表３で２年次の平均点だけを見れば、この２つの年度に大きな差は無い。しかし、この学生達がそれぞれ１年次に受けたライティング問題のスコア平均点と、1 年次と２年次にかけての点数の伸びに注目したい。2014年度の学生達の伸びは、2013年度の学生達の伸びの約２倍であることがわかる。

この平均点の伸びが増えた理由は、必ずしも事前指導によるものとは断言できないが、表２に示

したように、極端に少ない文量の解答を書く学生が減ったことが、成績の伸び率に多少なりとも良い影響を与えたと考えてもよかろう。

以上のように、「解答の文量」と「得点の伸び」について、2014 年度の学生達が 2013 年度の学生達より良い結果となったことがわかった。このことから、事前指導は学生の本番での解答に良い影響をもたらしたと言える。

4. まとめ

本稿では、GTEC ライティング問題で学生達がある程度の数の文を書き、自分の持つ力を発揮させるには、どのような事前指導やアドバイスが必要であるかを論じた。結果、必要な事前指導には、解答の基本的な型・段落構成を教えること、解答を書き始める前には日本語メモを書くこと、また、その日本語メモを書く際には自分の英語力と相談しながら書くことなどがあることを示した。さらに、学生達に複数の例題に取り組ませ、日本語メモや英文を複数回書かせる練習をさせると、本番の対策としてより効果的であるとも述べた。そして最後に、学生達が本番で書いた解答の文量や得点を、前年度の事前指導を受けなかった学生達のものと比較することで、この事前指導に効果があったことを示した。

今後については、多くの学生の答案用紙で間違いが指摘されている、接続詞の不適切な使い方(例えば because の単文での使用)なども取り上げて指導し、学生のライティング力の向上を目指したい。

参考文献

1) 有坂顕二，山西敏博，岡田晃，有坂夏菜子，杉山桂子，関根健雄：GTEC 及び TOEIC-IP の結果に見る、過去３年 間の小山高専生の平均点と受検者数の推移，「小山工業高等専門学校紀要」第 47 号，pp. 21-30（2014）

2) 大井恭子（編）田端光義，松井孝志（著）：「英語教育 21 世紀叢書　パラグラフ・ライティング指導入門 － 中高での効果的ライティング指導のために」，大修館書店（2008）

3) ケリー伊藤：「英語パラグラフ・ライティング講座」，研究社（2002）

注記

注1) GTEC for STUDENTS の詳細については、公式サイト(http://www.benesse-gtec.com/fs/)を参照。また、本校の 2011 年度から 2013 年度までの GTEC の各学年の平均点の推移や、本校の平均点と全国平均点との比較については、有坂他(2014)を参照。

注2) ライティング力のグレードの詳細については、公式サイト内、「GTEC for STUDENTS can-do statements」(http://www.benesse-gtec.com/fs/about/ab_feedback)を参照。

【受理年月日　2015年 9月11日】